田中道麿年譜稿

岩田　隆

人文社会教室

(1977年9月10日受理)

A Manuscript of the Biography of Tanaka Michimaro

Takashi IWATA

Department of Humanities

(Received September 10, 1977)

This is a biographical study of Tanaka Michimaro, who was one of the most brilliant students of the Suzunoya School, a school with Motoori Norinaga as its leader. Michimaro did not only produce scholastic achievements in Kokugaku (Japanese classical literature), but also played a greater part in contributing much to the development of the Suzunoya School.

Though he is consequently a very important figure in Kokugaku history, it unfortunately seems that there still have remained many dimmed images about his life. The author's purpose will be fulfilled if this article can throw a new light to fill the biographical vacuum.

まえがき

本稿は，鈴屋門では宣長の郷国伊勢を除けば，他国人では最も早期の入門者で，しかも師宣長より十七年も前に世を去った田中道麿（1724—1784）の伝記研究のうちの一つである。

道麿の国学史上に占める位置ならびに意義について，これまで断片的な言及のほか，ほとんど正当な論議の対象とせられたことを聞かない。その理由は，たとえば，

イ）師宣長があまりにも大きかったので，その陰に隠れてしまった。

ロ）著述として公刊されたものがほとんどない。

ハ）道麿没後，その門人の多くが鈴屋門に吸収されて，道麿の学問を独自に継承発展させる者が出なかった。

など，幾つかを挙げることが出来よう。

しかしその理由はともかくとして，道麿の学問とその歴史的意義について，改めて見直すべきではないかと思う。それは，彼の隠れた業績を発掘して顕彰することもさることながら，それ以上に国学の歴史の展開の上で彼がどのように係わっているかという，より大きな課題としての意である。

そこで筆者は，まずこの道麿研究のための基礎的作業の一つとして，その伝の解明に着手することにした。

周知の如く，道麿の伝記は僅かに晩年の十年足らずを除いて，ほとんど不明である。だが，夙に道麿の有力な門人であった加藤磯足[1]の「しのぶぐさ」[2]や，大正期における赤木邦輔氏の「田中道麿小伝」[3]，またそれらを綜合した形で綿密な考証を加えられた筧五百里氏の労作「田中道麻呂」[4]等によって，おおよその輪郭を描ける程度にはなっている。

思うに，かかる伝記の解明は，時の経過に伴う資料の散逸などによって，一層困難になる傾向は否めない。しかし一方，思いがけぬ新資料の出現や，周辺の解明によって，一挙に空白が埋められるような機会がないわけでもない。道麿の場合，必ずしもそのような幸運に恵まれ

1) 加藤磯足（延享四，1747—文化六，1809，享年六十三）。参考文献，服部敏良氏「加藤磯足—その著作と伝記—」（芸林会，昭和49年11月刊）。

2) 「しのぶぐさ」（「本居宣長稿本全集第一輯」本居清造著，博文館，大正11年刊，p. 755—p. 761に全文翻刻）。

3) 「万葉集問答，付道麿随筆」（万葉学叢書第一編，赤木邦輔，尾山篤二郎校訂，紅玉堂書店，大正15刊）の巻頭の「解題」の次に載せる。

4) 筧五百里氏「田中道麻呂と御国詞活用抄」（岐阜大学研究報告—人文科学—第8号（2），学芸学部，1959〔昭和34年〕）の「第一篇，田中道麻呂」をさす。

たわけではないが，それでも草稿本「田中道全集」[5]は前者に属し，目下刊行中の「本居宣長全集」[6]の新出資料などは後者に該当すると言えよう。

そこで，従来の諸研究を検討整理しつつ，たとい零細にしろ新出資料をそれに重ねて，一往の年譜を編むことにしたのである。これによって，従来の研究を一歩でも進め，且つまた将来の修正補訂の捨石としての役をも果し得れば，と願う者である。

年譜の方針としては，

1) 編年体方式によることにした。
2) 道麿伝のほとんど唯一の根本資料「しのぶぐさ」の全文をそのまま，それぞれの年次に分割配当することにした（従って，年次順につなげばやがて全文の復元となる）。
3) 「田中道全集」からは，伝記解明に資すると思われる詞書等を全部，なるべく原文のまま抄出して掲げることにした。
4) 原本また引用文の振仮名・割注・注記などは，印刷上の制約により，概ね該当箇所に（ ）で示すことにした。
5) 各資料の説明，相互における矛盾，その他についての注記は，〔 〕で括って区別した。

おおよそ，以上のような約束の下に，可能な限り資料自体に語らせるという，客観性を原則とした。

なお，安永から天明にかけては，資料も漸次多くなるので，別に「田中道麿年譜考証」（仮称）を用意して一切をそれに譲ることにした。紙幅の制約による措置とは言え，諒とせられたい。

田中道麿年譜稿

○享保九年甲辰（1724），一歳。

（しのぶぐさ）

つれづれとふりくらす五月雨の空の，いとゞ暮がたきに，そのこととなく物悲しうて，はし近うながめいだしつゝ，すゞろにこしかたの思ひつゞけらるゝまゝに，

ひたすらにむかしをしのぶ宿とてや軒端の草も茂りゆくらむ

また，

五月雨の古きむかしを諸ともにかたらふ友もなき身なりけり

などひとりごちて，あはれいたくも老にけるかな〔このとき磯足六十歳〕などうちなげかるゝにつけても，思ひ出らるゝことは，磯足若かりしほど，道麻呂の翁にしたがひて，万葉集をはじめ，これかれのふみどもを学びけるも，まだきのふけふのこゝちせらるゝを，飛鳥川流れてはやく，翁身まかられて，ことしぞ廿三年にはなりにける。此翁は，世にめづらしき人にてありけり。その有しやうは，みのの国多芸ノ郡榛ノ木の里人にて，父は田中のなにがしとて，おほみたからの身ながら，苗うゑ稲かるわざをもまめやかにはせで，なにくれと，やつやつしうあざれたる事のみをふるまひたる人とかや。(p. 755)

「田中道麿小伝」（以下「小伝」と略称する）に，

田中道麿は中御門天皇享保九年（養老郡志八年トス）美濃国多芸郡榛木村（現養老郡広幡村大字飯木字居村三百九十八番地，此旧宅地二畝二十四歩，今は村瀬義一氏所有）に生れ，(p. 1)

とある。

因みに，宣長の手控「来訪諸子姓名住国并聞名諸子」[7]には「（酉七月廿日）美濃国多芸郡榛木村（俗作飯）（ハンノキ養老滝ノ辺）田中庄兵衞，道万呂」と誌されている。

○享保十七年壬子(1732)，九歳。

（しのぶぐさ）

さる家に生れながら，翁をさなき程より，見るものきく物につけて，歌をなんよまれけるとぞ。いともいともあやしき人なりけり。はじめて歌をよまれけるは九つといふとしとか。手ならひの本のつゝみ紙に，

十九本手本也けり六三郎和俗文章手ほんなりけり

といふ事をなんかきつけられける。六三郎は其ほどの名なりしとぞ。こはさとび言のまゝなれど，いさゝかもてにをはのたがひなくて，其心明らかにきこえ，また二五の句に，おなじ言葉のあなるは，いともいにしへの歌のしらべなるを，それにかなひたるは，後つひに万葉集の歌を，深くしのばれぬべきことのきざしともいふべく，又言霊の神のさちともさちとやいふべか

---

5) 「草稿，田中道全集」（写本），道麿の歌集でほぼ年次を逐って（宝暦七年以降天明四年まで）約一千有余首を収めている。転写本ながら道麿の伝記解明に寄与すると思う。同書の奥書に，

よろこひなかしといふとしの二歳（フタとし）
睦月中の九日これをうつしぬ
〔嘉永二年一月十九日ナラン〕松下しけ蔭
この文はもと堀田梅衞ぬしのもたるを，をしへ子小塚の直持といふ人こひゑて，しみのすみかなるをとり出てうつし置ぬ，我ゆゑよし有てうつしとりぬ，

とある。いずれ所蔵者によって公刊せられればと思う。

6) 特に断らない限り「本居宣長全集」は，筑摩書房刊行のそれをさす。
7) 「本居宣長全集，第二十巻」p. 245 所収。

らんと，あやしくたふときことなりかし。(p. 755—6)

「名古屋市史，人物編，第二」[8] の「田中道麿」に，

山田千疇のいつまで草に，田中道麿は，美濃国多芸郡版木村の人にて，初田中茂七といひ，後庄兵衞とあらため名古屋へ出けるよし，茂七といへる頃，同村に茂七といふ人ふたりありき，異名赤茂七，白茂七といひし由道麿は白茂七なるよし其村の人加藤九十郎といふが咄也とあり，(p. 105—6)

とある。

○宝暦元年辛未（1751），廿八歳。

〈しのぶぐさ〉

をよずけゆくほど，近くも遠くも，そのわたりに歌ぶみもたる人あれば，かりても見写しもとりなどして，ますます歌に心をよせられけるに，見と見られけるふみども，みな六七百年こなたの物なれば，何くれとうたがはしき事どもの多かるまゝに，歌に多高き人とあるには，行とぶらひて，心得がてなるふしぶしをとはれけるに，こはひめごと也，そはわればかりのもののしりきはむべき事ならずなどいひて，さだかに理りもてときさとす人あらざりしかば，歌てふものこそいとも心得られね。さることまなびてなににかはせんとて，廿八といふとしより，歌よむこともふみ見ることも，ふつに思ひとゞまられけるとなん。(p. 756—7)

「小伝」に言う，

彼は貧乏なる農家に生れた為に，少時三世相を暗記し，また節用集を空んじ，覚えた箇所を破り次々に食ひつくしたと云ふが如き記憶力強靱なる神童であったが，学ぶに資なく，大垣俵町書肆平流軒に奉公するに至ったと口碑の伝へる所である。(p. 3)

○宝暦七年丁丑（1757），三十四歳。

〈しのぶぐさ〉

さて其頃は，あやしげなるをのこどもをひきゐて，池ほり堤つくことなどをなりはひとして，伊勢近江わたりなどにも常に行通はれけるに，三十四といふとしに，あふみの国の彦根に行て，なにとかやいふ寺に日頃やどり居て，かのなりはひのことをものしていますかりけるに，ある日あるじの僧のいへらくは，此となりなる大菅のなにがしといふ人こそ，歌の道にならびなき博士にはあれといふことを，もののついでにかたりけるを，翁かたはらにきゝをりて，はやくのとし頃，うたがはしう思はれたりける歌ぶみのをぢをぢを，ものにかきつけて，大菅氏に此ことさとし給ひねと，あるじの僧にあつらへられけるに，二日ばかりありて，こたへものして返しけるを，翁，いとうれしくもこそといたゞき見て，心ゆかぬさまして，さてもしたりがほにはかゝれたれど，是ばかりのことは，おのれも明らめしりつるものを，さは，となりのはかせも，心にくききはの人にはあらざりけるよと，つぶやかれけるを，あるじの僧きゝて，また其よしつたへければ，大菅おどろきて，かの人をあなづるにはあらねど，身のわざのいやしきよしなれば，深きことわりはえさとらじとて，たゞ大かたにこたへたりつるを，あなかしこ，よしある人にやあらん。いでさらば，たいめしてつみゆるされなんとて，やがて寺に入来て，翁にあひて，おのれは大菅の中養父[9] とて，加茂の真渕といふ人のをしへ子にて侍る也。さきにとひ給へるをぢをぢ，まことにはかうかうなんと，加茂の翁のいにしへ学びのおもむきもて，くはしう物がたられければ，翁，さこそあらめとうべなひて，とし頃のうたがひども，ちりもくもらずはるけ侍りぬとて，かぎりなくよろこびて，さて，此五とせ，六とせ，歌学びうちすてつる事などをもかたりて，いまより又，歌の道に入たち侍りてんとて，をしへ子になし給へと深くちぎりて，それよりかの堤つくわざをもやめて，もはらそのをしへをうけん料に，やがてかの彦根に住なんとて，井伊の殿に仕ふるなにがしの家の仕へ人になりて，いとまいとまのひまには，夜昼となく大菅氏のもとにかよひて，万葉集古今集などをひたぶるに学ばれけるとなん。(p. 757—8)

「小伝」に引く，

滋賀県人物志云。田中道麻呂，通称ハ庄兵衞，東海道土山駅ノ轎夫ナリ。賤業ニ従フト雖ドモ国学ニ志アリ，良師ヲ得ント欲シ常ニ之ヲ思フテ轎ヲ舁グ。一日一旅人ヲ舁グ，其人国学ニ通ズルモノノ如シ。行ク行ク語テ其学ヲ察スルニ知ラザル所多シ，サレド盛ニ大菅中養父ノ学ヲ称ス。道麻呂以為ク是浅学者ノミ，従テ学ブニ足ラズ，然リト雖ドモ大菅中養父アルヲ知リ心窃ニ喜悦ス。遂ニ彦根ニ来リ之ガ弟子トナル。道麻呂日々唯書ヲ読ムノミ。納屋七右衞門ハ彦根ノ豪商ナリ，任侠之ヲ聞キ彼ヲ己ガ家ニ置キ為ニ多ノ書ヲ購フテ之ヲ読マシム。居ルコト三年，学成テ郷ニ帰ル。幾バクモナクシテ某侯ノ聘ニ応ジ俸ヲ賜フ。遂ニ国学ヲ以テ名ヲ海内ニ顕スニ至ルトイフ。云々。(p. 3)

〈道全集〉

「八月十五夜あふみの海に月を見侍りて」一首。

「同し時に千之先生〔大菅中養父である〕のうた」一

8) 名古屋市役所，昭和9刊。

9) 「小伝」に云う，「大菅中養父，名は圭，字瓚美，通称権兵衞，世々彦根藩士印具氏の家老にて中藪村に居たので村名を号としたのである。漢学は荻生徂徠の古文辞学に学び，国学は賀茂真渕に服し古言の研究に従ひ，当時甚だ高名であったのである。」(p. 4)（宝永七，1710—安永七，1778，享年六十九）。

首。

「君かすむ里はいつこそと問給ふる人にこたふ

老人の若ゆてふ名の滝のせはわか住里に流れこそすれ」

「千之に奉る」一首。

「千之のかへし」一首。

※道麿は中養父と共に近江にあって，仲秋の月を賞したことが知られる。

○宝暦八年戊寅 (1758)，三十五歳。

(道全集)

「千之此春見え玉はさりけれは，

頼こし春は暮にき田跡川の滝もや君を待つつあらん」

「千之先生の，

秋もまたいたり至らぬ此頃は音し音せぬ萩の上風

とよみ玉ふを羨て，

人とはぬわか宿なから秋きては音信そする萩の上風」

「正月より五月まで旅にありて」一首。

※何処へ何の目的で旅に出たかは不明である。

○宝暦九年己卯 (1759)，三十六歳。

(道全集)

「はやう近江の国に行て，あそひし時，常に千之先生の許にありけるを，今は尾張の国にうつり住て，先生をおもひて，

あふみてふ名はいにしへにうつりゆきてあはての森に恋つゝそふる

別れつゝあはての森の露霜にぬれてかはかぬ我袂哉

千之かへし，

おもひきやあはての森のあはてのみ空行月にあくかれんとは」

※これによれば，この年すでに道麿は尾張に移り住んでいたこと，また中養父に親しく教えを受けた時期は相当早くからであったことになる。

○宝暦十一年辛巳 (1761)，三十八歳。

(道全集)

「彦根ゐとくゐむ，月次の会席の諸君によみて奉る，四月九日

月ことにあふみてふ名をたのみつゝ越てそきつる関の藤川」

この歌の「かへし」の作者は，医元哲，貞寛，矩富，弓観の四名である。

「甥なるものを津の国につかはしおきて」二首。

「千之述懐」一首，「和る歌」一首。

※四月に彦根を訪れていることが分る。返歌を詠んで迎えた四人については未詳。甥についても不明。

○宝暦十三年癸未 (1763)，四十歳。

(道全集)

「卯月にはこむと契りし人に遣しける，

卯月こそ来んといひてし契りより今年は春のをしけくもなし

千之返し

あふことは夏のゝ草の霜かれて秋も末葉となりにけるかな

とて，九月六日に来り玉へり」

※九月，中養父は道麿を（尾張に）訪れた。おそらく江戸下向の途次であったろう（明和元年の条参照）。

○明和元年甲申 (1764)，四十一歳。

(しのぶぐさ)

かくて，十とせばかりもかしこに住れけるに，いかなる故かありけん。明和のはじめの頃より奈児屋にうつりて，はじめは商人の家人となりて，いやしきわざをもなし，後はある殿人の家に仕へられけるに，おなじつらなる人どもの，おほかたのまじらひはせずして，暇だにあればひたぶるにかきこもりて，歌ぶみをのみいそしみ学ばれけれど，さりとて，さるかたの聞えある人などにもほのめかすことなく，歌などよみても，たゞおのれひとりの心やりにせられければ，さる人ありとしも，たれしる人もあらざりしを，(p. 758—9)

※彦根に約十年在住したとのこと，明和初期に名古屋に移り住んだとのこと。この二点は検討の要があろう。

(道全集)

「千之先生に武蔵によみてつかはしける，

東路の旅の衣も春過て夏来にけりとぬきかふらんか

武蔵野の草の枕のいふせくていをねかぬらん君をしそ思ふ」

「東照宮にまうてゝ」一首。

※東都の中養父への歌は誰かに託したのであろう。東照宮は名古屋のそれである。

○明和四年丁亥 (1767)，四十四歳。

(道全集)

「此秋摂州にいたりける，

をしてるや難波の浦に舟はてゝ芦のかりねの旅そ侘しき

難波方みつの浜へは朝夕の塩みぬ時の名にこそ有けれ」

「千之に奉る，

とこの山名取の川の万代にたゆる事なくあふよしもかも」

※この道麿の大阪行について，筧氏の考証がある，

〔諸書〕の道麻呂の条，何れも「大阪に住す」とし

てゐる。それにつき，赤木邦輔氏は，大阪府立図書館蔵の「大阪名家著述目録」に，道麻呂が「大阪に在住してゐたと記されてゐるので，この著述目録の編者上松寅三氏にその根拠を照会したところ，「単に古老之伝説に憑拠いたし候義に御座候」といふ回答であったこと，渡辺直麻呂宛道麻呂の書簡に，「浪花なるをし〔へ〕子なり云云」の文字のあること，「浪花金襴集」に「国学田中道麻呂」の文字があることなどから，大阪に在住し，国学の講筵を開いてゐたことを肯定してをられる（雑誌「自然」五の五，大正十五年八月号）。

赤木氏の考証に従ひ，道麻呂の大阪在住を肯定するとすれば，その大阪在住は，宝暦の末頃であったらう。赤木氏は，彼の彦根在住を三年としてをられる（この推定の根拠は示されてゐない）。この推定をとるとしても，宝暦九年か十年には彦根を去って大阪に往き，五，六年にして名古屋へ移った。

学究として最も恵まれた環境であった彦根を去ったについては，どんな事情があったのであろうか。大方の教示を仰ぎたい。（前掲論文 p. 67）

○明和五年戊子（1768），四十五歳。

（道全集）

「十月，伯孔の東都に旅するを送る，

立わかれ，旅行君，うしとな，思ひそね，帰りこん，程も，久しけなくに，うしとな，おもひそね，

立わかれ旅に行君幸ましてはや帰りませ旅にゆくきみ

今はたゝ名のみ流れて旅人をとゝめもあへす関の藤川」

※長歌としては初出。伯孔，未詳。

○明和六年己丑（1769），四十六歳。

（道全集）

「千之，六十賀によみて奉る，

手を折て君か千年をかそへそめ十つゝ六つをかつ得たるかも」

※中養父六十歳。

○明和七年庚寅（1770），四十七歳。

（道全集）

「千之に奉る」一首。

「千之六十一に成玉ふに奉る，

としの名をありのことことかそへきて同し昔に若かへる君」

「千之に奉る」一首。

「寄松祝，彦根中藪，吉田義昭の父五十賀」二首。

「四月初旬，彦根にゆきて，慈雲院の月次の会に物して」題詠数首。

「吉田義昭のいせにまうて玉ふをおくる」二首。

「吉田義昭の

立別けふ古郷に帰る君又あふみちはいつの比そもといへるにこたふ，

いつはとは時こそわかねみのゝ国関の藤川たゆるひあらめや」

「千之先生に，

ことさへく，から国のふみ，式島の，大和国の，ふることも，まくはしみして，ふた国に，ふたわたらす，大菅千之の君，中藪の君はや」

「十月三日，音誉一周忌に」一首。

「こゐの里にて」一首，「御器所の里」一首。

※おそらく師中養父の還暦を祝う意から，四月彦根を訪うたのであろう。「こゐ」「御器所」いずれも名古屋の地名である。

○明和八年辛卯（1771），四十八歳。

（道全集）

「千之に奉る」一首。

「母に同し人の身まかり給ひけるに」一首，「其人八十歳也」一首，「五月二日の日也けれは」一首，「おなし時に」一首，計四首。

「彦根に遊しとき」二首，「同しとき慈雲院にて，五月十一日会」数首。

「柏渕琴松の，菊の露てふ酒をおくり玉へる時に，よみて遣しける」二首。

「五月の中ころ，彦根に旅居して立帰る時，林義房の，道丸ぬしみのゝ国に帰玉ふによみておくりけるとて，（長歌，略）とよみて給ひけるに，かへし」一首。

「義房によみてつかはしける」旋頭歌一首，古体長歌一首。

※五月彦根に遊ぶ。柏渕琴松〔美濃高田の柏渕在香のことか〕，林義房〔未詳〕の名あり。「母に同しき人」とは，道麿幼にして母を亡いしか。

○安永元年壬辰（1772），四十九歳。

（しのぶぐさ）

安永のはじめばかりに，狂歌といふものかきあつめたる冊子のあるを見て，其歌どものよしあし，また後の世のならはしにて，いにしへのことわりにたがへる事どものあるなどを，ふとあげつらひて，物にかきつけられたりしが，こゝかしことちりぼへるより，はじめてかゝる人ありと，こゝらの人のしる事にはなれりけり。かくて，なにがしくれがしみたり四人，いと心にくき人に思ひて，たいめをこひて歌ぶみのことどもをとひきくに，よそにきゝたりしよりは，近まさりして，めでたくたふとき事どもなりければ，かゝる人をかくておきたらんは，あたらしき事なりとて，又おなじ心なる人どち，これかれかたらひあはせて，つかへをし

ぞかせて，なにがしの所に，住どころものして，むかへいれて，もはらいにしへ学びの大人となんあがまへける。かの人々は鳥井海士彦，早川白津子，桜田茂見などいふ人々なりけり。それよりおしたちて，いにしへ学びのおもむきをときをしへられけるに，やうやうにひろごりゆきて，ともがら多くなりて，この尾張国に，皇国のいにしへしのぶ人々の，をちこちさかりに出きぬるは，またく此翁のいさをになん有ける。磯足も，其頃よりぞをしへ子にはなりぬる。(p. 759—60)

(道全集)

「義兄[10]兼題三」五首。

「千之先生の」歌に答える一首。

「去年の九月，彦根のよしえの主〔小林義兄〕ゆ，玉つさしていへらく，尾張の鳴海の里に，大舟のゆくらちふ人あなりと，海竜大とこ[11]ののらへ給ひつ，汝かすむなるみぬの国ゆは，道も遠くしもあらさらんを，たとりつゝ古言ふりの歌をよみかはしてよとなも，いひおこせたりける，定まへなき時雨の雨にさへられ，寒らなる雪霜にをかされて，いつしか年もくれてき，あら玉の春さりくれと，きのふといひ，けふと春もくれて，卯月たつ日になん思ひ立て，道の行てのあはての森を越て〔一首〕，熱田にて〔一首〕，有松にて〔一首〕，をけはさまにて，今川義元ぬしの墓に〔一首〕，鳴海にて，ゆくらへよみてつかはす

我ならてひとの国にも音高く鳴海の海をみにこし我そ

卯月立鳴海の里の時鳥尋こしあれに初音きかせよ

鳴海の野へにいほりし，宿りぬ，呼子鳥の鳴けれは，

うらわかみ草の枕の独ねに心ほそくも呼子鳥かな

鳴海の橘の実丸ぬし，

此朝け初めてみらく時鳥さわたる声ははるけくきけと

といへるにこたへて，

時鳥またしき程のしのひ音を君か聞けんことそやさしき

ゆくらの

玉衣の鳴海の浦をとひし人は玉あへはこそあひぬる物を

卯の花は咲てあらぬに高々としら雲のへゆ時鳥なく

春花は咲てちるとも又しもとはねそか国の滝のひゝきのたえさることく

いへるに，

多度川の滝つ山川えにし絶すて氷とけの鳴海の海になからへきなん

なるみかたやへの塩路の絶さらはなも田跡川の滝つ河内はたえしとそ思ふ」

「よしえのぬしか艸枕記の奥に書付給へる人々の歌を聞て〔一首〕，こは中養父翁の，

あれも又手携りて綾足の翁か許をとはまし物を

との玉へるを思ふ也，〔以下〕吉田のつぐ，せむたの旧貫，増賓大徳，杉原勤の主〔に答えて各一首〕。」

「よしえぬしよりおこせたる，みくさの題をよめる」数首。

「鳴海郷にありし時，橘実丸君之初而見良久止歌比給留に，奉和歌，

杜鵑今朝霜君仁見え鶴羽立花の木の影吉誉美古曽

実丸君乃加志阿多敝給留，志具例の記，知布書乎見侍弖作歌〔中略〕

右六首を，久佐具佐艸，となつけて，実丸へおくる」

「五月の中こそ〔ろカ〕淡海のまたしのぬし，わがり尋ねき給へる時」三首。

「六月，よしえ主かあふみよりおこせたる，三くさの題」数首。

「六月廿四日，よしえより，初秋の歌三体によみてよといへれは」数首。〔以下，義兄兼題での詠歌多数あるも省略する〕

「松井忠貞ぬしの，

若ゆてふ滝をたのめる君なれは万代ふとも老せ〔さ〕らまし

とよみて給へるにこたへて」二首。

「わらは友たちなりける人に，あまた年へてあひて」一首。

「よしえのすゝめ給へる，はつきの歌枕六首」

「人々川瀬の里につとひ給ひ，から歌作り，歌うたひしのへるを，つはらにしるしにたる，垣津籏見，とふふみをみて，おもひつゝけつる」一首。

「よしえぬしの給へる，三くさの題を」数首。

※道麿の名は漸く世に知られ，交友も多くなってきたことが知られる。作歌活動も前年から急に盛んとなって，道全集所収歌の半分以上がこの両年に詠まれている。

○安永二年癸巳 (1773)，五十歳。

(道全集)

「安永二年癸巳二月，江戸に在」と記す。

「江戸にて」三首。

「四月十五日，蒔田の主，母のやまひによりて尾張にゆくに」三首。

「海竜上人のよめる題にて，春廿首」

※筧氏論文に，

10) 「小林義兄」(寛保四，1744—文政四，1821，享年七十八) は，道麿と親交があった。

11) 「海量法師「(享保十八，1733—文化十四，1817，享年八十五) は，道麿と親交があった。森銑三氏「海量法師」(「森銑三著作集，第二巻」中央公論社，昭和46刊，所収) 参照。

道麻呂の歌集「垣根の落葉」によるに，安永二年二月江戸に遊び，　数ヶ月滞在して，　県居門の巨匠揖取魚彦[12]と親交を結んだのであるが，この安永二年は真渕の没後四年目である。(p. 66)

とある。

○安永三年甲午（1774），五十一歳。

（道全集）

「雅俗随筆の中に」二首。

「同九月，みのゝありかのぬし〔柏渕在香ナラン〕」一首。

「彦根，横山五宗を哭する」一首。

○安永四年乙未（1775），五十二歳。

（道全集）

「乙未の秋，原正展のめきみ，古郷の木曽にて身まかり給へるを，とふらひつかはすうた，〔五首〕

右は，原正展ぬしへよみて，またせしなり」

「堀田世能（タヽヨシ）ゆ，

あつふすま名古屋の里はきみゆこそならの葉風も吹つたへてめ

といへるに，こたふ」二首。

○安永五年丙申（1776），五十三歳。

（道全集）

「六月十二日，鈴木の早稲根の宅のうたけに作し」長歌一首，反歌一首。

「六日廿八日，坂本のかなへの主，薬しの道学ヒせんと，其道のうしの本に至り給へるを賀て」三首。

「西村の海辺かもとめによりて，よめる歌八首」

※鈴木早稲根，坂本列峯，西村海辺は何れも道麿門である。

○安永六年丁酉（1777），五十四歳。

（道全集）

「越人ふけんふ〔ママ〕しに」二首。

「時鳥，四月九日会，兼題」二首。

「暮雨の東にゆくに[13]」二首。

「鳥居うしの東より帰り給へるに」一首。

「うなひぬしの〔歌〕といへるに」一首。

「堀田氏求，契鶴遐年，六十賀」一首。

「七月朔日会，七月歌」二首。

「七月十八日に立て，廿日朝，本居先生にあひて，よみて奉る，

いせの海，千尋の浜に，愛八師，玉はよるとふ，さゝらかた，錦のうらに，浦くはし，貝はよるとふ，その玉を，ひりひてしかと，たもとほり，こしくもしるく，吾脊子か，愛き教に，其かひの，かひこそ有けれ，やゝやゝに，磯間いたとり，浦つたひ，ひりひ得まくは，白玉真珠.[14]

反歌，

伊せの海の清き渚の白玉を袖にこきるゝけふのたぬしさ

おなしとき，久方[15]へよみてやりしうた」二首。

「七月廿五日，松坂嶺松歌院歌会に」四首。

「同し会につとひ給へりしうま人らに，よみて奉る歌」三首。

「本居先生に奉る，

あきつしまの大人なる物を飯高の人とそ人ももとなおもひし，

同しく廿日，山辺五十師原之考，といふ書を，宣長うしのみせ給へるに，よみて奉る歌，〔二首〕」

「九月十日，兼題」数首。

「九月廿五日」二首，「同し時，長うた」一首。

「武加志奴毘，（歌ハ略ス），安永六年酉二月九日，田中道麿，人々の歌は略て，翁のをこゝに記」数首。

※何と言っても，道麿の松阪訪問，宣長との対面と交歓の意味が大きい。あの有名な真渕との「松坂の一夜」には及ばぬかも知れぬが，それに準ずる国学史上のモニュメントであろう。

○安永七年戊戌（1778），五十五歳。

（道全集）

「為督月寿翁七十初度」一首。

「七十賀，柏蜆」二首。

「十月七日，なゐ〔地震〕をよめる」一首。

「中養父（虫喰）コハ中ヤフ主ヲイタミタル歌，

かくのみに有ける物をあふみの海見にことのりし我脊の君はや

行川の過にし君をあふみの海へたによる浪しくしくおもほゆ

「寄妹脊山，至誠院賀」一首。

※大菅中養父死去，師弟の情愛が二十年以上も続いていたことの意義は，改めて強調さるべきであろう。

○安永八年己亥（1779），五十六歳。

---

12) 架蔵の写本「千歌」の内題には，「千歌巻一，楫取魚彦選，〔割注二行書〕小林義兄注，　田中道麿評」とある。ただし転写本で，奥書は，「尓時文化のもとつとしの秋葉月のつごもりがた，あづまの客館にてうつしぬ，朝霞楼のあろし，中むら連千足」とある。道麿関係資料の一つとして紹介しておく。なお，道麿と魚彦と交渉のあったことは確実である。

13) 服部徳次郎氏「暮雨巷暁台の門人」（愛知学院国語研究会，昭和47刊）参照。

14) 「本居宣長稿本全集，第一輯」所収の「歓歌」はすべて万葉仮名で書かれており，措辞に一部分小異がある。同書 p. 745 参照。

15) 「荒木田尚賢」（元文四，1739—天明八，1788，享年五十）。おそらく道麿とはすでに交渉があったのであろう。

(道全集)

「六月廿一日，あま彦の江戸にゆくををしみて，よめる歌」四首。

「同廿三日，真竜君へよみておくる，

音に聞目にはいまたみぬ遠江豊田の君をあひみつるかも」

「同し時，真竜ぬしにつたへて，ひし丸ぬしへつかはす，

なる神の音にのみきゝし栗田の土丸のうしにあふよしもかも」

「七月朔日会に，七夕」一首。

「安永八年亥，霜月十八日，伊勢屋忠兵衛もとめ」三首。

※鳥居海人彦，内山真竜，栗田士満，植松有信である。

○安永九年庚子 (1780)，五十七歳。

(道全集)

「松坂紀，安永九年庚子正月」の一行あり。

「四月，有尾へよみてつかはす」賀歌長歌一首。

「松根の求玉ふ色紙に書し歌」一首。

「九月中旬，遠州真竜来り玉ふわかれに，別〔二首〕，賀〔二首〕，田〔二首〕」

「平尾の栗田真菅ぬし，十一月中旬に真竜君にたくひて，来られしに送る」二首。

「ひしまろ〔栗田士満〕へよす」短歌，長歌各一首。

「大津なる篁のしけえか，志賀の都の跡の，今は山はたけとなれるより，ほり出たると，我に得しめし此瓦のかたわれを，又二またのまたつぬしにゆつる時に，その古瓦にそへたりけるうた，田中の道麿，

しけえか得しめたる瓦を，又真竜にゆつる」長歌一首，反歌一首。

「真竜ぬしへ」二首。

※この年の最大の出来事は，何と言っても宣長に正式に入門したことである。荒井有尾，松下真常，内山真竜，栗田真菅，栗田士満の名を見ると，すでに鈴屋圏の広がりの中にあることを感ぜしめる。

○天明元年辛丑 (1781)，五十八歳。

(道全集)

「三月九日，至誠院会に，寄霞」一首。

「三月十五日，花契多春」一首。

○天明四年甲辰 (1784)，六十一歳。

(道全集)

「もとなくさ，

天明四年春より病にわつらひて，打こもりをるあひたに，心にうつり行く年をみたりにかきつく」

(しのぶぐさ)

さて翁の常のおこなひよ，着ものくひもの住どころ，又女のうへなどにも露心なくて，よろづたゞありにものして，ふみ見歌よむよりほかはなす事なくて，いみじうめでたく，おほかたの人の絶ておよばぬさまになんありける。かくては，さとりたりなどいふ法師のおこなひにひとしともいふべけれど，さるくすしきかたはなく，ものの哀をしるといふやまとだましひいみじうて，いたり深く，まめまめしき翁になんいましける。しかるに，さばかり高きよはひといふばかりにもあらで，天明の四とせといふとしの神無月の四日，六十四にて身まかられけるぞあたらしきや。其をり，やまひやうやう重くなりて今々と見えける時に，

けふらかも横さま風のおほひこばいのちをしけどすべしらましや

となんよまれける。中頃の世より，学問などする人は，死んとする時，歌にまれ詩にまれ，心ぎよく思ひとりたるさまのそら言どもよむを，たけきことにいひ，もてはやすめるを，かの業平中将の，つひにゆくの歌こそ人のまことの心にして，いとめでたく昔よりたぐひなき事にいふを，此翁の此歌も，中将のに次てめでつべきものにこそありけれ。さるを教へ子のむねむねしき人々も，今は大かたむなしうなりて，諸ともに昔をしのぶべき人もなければ，世にあやしくたふとき翁の有さまをもしる人だになくなりなん事のあたらしく，なにくれとしのばるゝまゝにかくしるしつれど，老のひがおぼえなれば，猶もれぬることもたがへるふしぶしも多かりなんかし。

文化三年五月　　磯足 (p. 760—1)

※かく道麿の享年を六十四歳としたため，五十五歳説と共に混乱を惹き起こす因となった。しかし，「石上稿」を始めとする宣長関係資料や「ひとよばな」[16] の道麿の跋文その他に徴して，六十一歳死去は動かない。

16) 僧海量の歌集。「和歌和文集，上」(日本名著全集，江戸文芸之部，第二十四巻，昭和2年刊) 所収。p. 501 参照。